

中等教育へのキャリアカウンセラーの導入

酒井 淳平 (立命館宇治中学校・高等学校)

1. 問題の所在、研究の目的

「学校から社会・職業への移行が円滑に行われていない」との問題意識から、キャリア教育は現在の国の教育政策として推進されようとしている。このように重視されているキャリア教育ではあるが、専門家を学校に導入し、本腰を入れて実践しようという学校はほとんどない。たとえばキャリア開発支援の専門家として「キャリアカウンセラー」があるが、それを導入している学校は全国でもごくわずかである。これは臨床心理の分野で「スクールカウンセラー」が専門家として多くの学校に導入されたのとは大きな違いである。しかしこのことはキャリア教育が現場で推進されにくく根付きにくい原因になっているのではないだろうか。

今の日本社会でキャリアカウンセラーの存在は必要不可欠になってきている。それを支えるべく厚生労働省は10年前に「キャリア・コンサルタント5万人計画」を計画決定し、キャリアカウンセラーを認定・養成している。現状では学校現場へのキャリアカウンセラーの配置は、大学のキャリアオフィスにとどまっている。しかし、今後中学校や高等学校でキャリア教育の実践をより進めるためには、専門家としてキャリアカウンセラーの存在が必要ではないだろうか。

一方で専門家が本当に必要なのか、専門家が学校現場でできることはあるのか、本当に専門家を導入することで学校のキャリア教育はいい形で推進されるのかという疑問もあるだろう。そこで本研究では、キャリアカウンセラーは学校現場で専門家として何ができるのか、またどうあるべきなのかを理論と実践の両面から明らかにしたい。

幸い研究者は中学校・高等学校の教員で学校でキャリア教育を推進する立場にあり、一方でキャリアカウンセラー（CDA）を取得することができた。現場での実践と、専門家・研究者として一歩外から分析することの両面から研究を進めていきたい。

2. 研究方法 研究は理論と実践の両面から以下のようなことを中心に進めた。


<理論>

- ・キャリアカウンセラーについて、その専門性や現在の状況を明らかにした。
- ・中学校や高等学校においてカウンセラーといえば「スクールカウンセラー」である実態をふまえて、スクールカウンセラーについて、役割やその必要性、これからの課題について明らかにした。
- ・キャリア教育が国の政策として進められていることを明らかにし、専門家の必要性を指摘した。
- ・キャリアカウンセラーを専門家として配置している先行実践を調査した。

- ・以上のことをふまえて、キャリアカウンセラーをキャリア教育・キャリアカウンセリングの専門家として学校に配置したときの役割や可能性について考察した。

<実践>

勤務している中学校・高等学校において「キャリアカウンセラー」の専門性を活かした実践を行い、「高校生へのキャリアカウンセリング」「学年に対する取り組み」「学校と外部をつなぐ役割」「教職員への情報提供や研修」という4つの側面からまとめた。

 最終的には理論と実践から、中学校・高等学校へキャリアカウンセラーを導入することの意義、どのようにキャリアカウンセラーを導入することが望ましいのかということについて考察した。

3. 研究の結果 (研究成果については最終的に1冊の冊子にまとめた)

本研究では以下の2つの問いへの答えを出すことが重要である。まずそのことについて報告する。

なお、キャリアカウンセラー（キャリア・コンサルタントとも呼ばれる）はキャリア形成の専門家で、個人の望ましいキャリア選択・開発を支援する役割を担う。現在キャリアカウンセラーは国の施策としても養成や資格認定が進められており、有資格者は2011年3月末現在で3万人あまりである。

<研究の問いへの答え>

1) キャリアカウンセラーは中学校や学校現場で専門家として何ができるのか？

キャリアカウンセラーはキャリア教育やキャリアカウンセリングの専門家として、「生徒個人へのキャリアカウンセリング」、「各学年へのキャリア教育実践」、「就職希望の生徒への指導」、「教職員や保護者への情報提供・キャリアガイダンス」、「学校と外部をつなぐコーディネーターの役割」などができる。カウンセラーの専門性は個人への対応だけでなく、集団への対応や外部との連携も含んでいる。したがって上記のように幅広い実践が可能である。

⇒キャリアカウンセラーには専門性だけでなく、資格取得前後の学びの過程でできる人のつながりもある。したがって上に書いたことは一定水準以上のレベルで実践できる。結果的に、キャリアカウンセラーがいることで生徒の進路意識の向上や、学校のキャリア教育実践のレベルの向上が期待できる。

2) キャリアカウンセラーは学校現場でどうあるべきなのか？

キャリア教育推進の必要性が強く言われている現在だからこそ、専門家としてのキャリアカウンセラーの存在は重要である。現在各学校で活躍しているスクールカウンセラーが、特に心のケアで大きな役割を果たしている反面、学校外部の人材であることによる限界も明らかになっている現状を考えると、キャリアカウンセラーは教員がなるのが望ましい。毎日学校にいる教員が専門家になることで、学校の動きや生徒実態もよくわかり、教員との連携もとりやすい。しかしキャリアカウンセラーの専門家として教員をあてるときには、その教員の働き方についての配慮も必要である。また、系列の大学に多くの生徒が進学する大学附属校では、「教育目標、進路指導のあり方」や「組織としての有利さ」からキャリアカウンセラーの導入は特に有効である。

＜高校生へのキャリアカウンセリングモデル＞

高校生へのキャリアカウンセリングは、キャリアカウンセラーの大きな仕事である。また、中学校や高等学校にはすでにスクールカウンセラーが配置されており、生徒個人へのキャリアカウンセリングを示すことが、スクールカウンセラーとの比較からもキャリアカウンセラーの役割や面談の特徴がわかりやすいと考えた。そのため本研究でも個人へのキャリアカウンセリングは特に重視し、試行錯誤する中でモデルを作り上げた。成果報告書でもこの部分は単独で取り上げて報告したい。

【キャリアカウンセリングの概要】

- (1) 面談は1回30分、一人の生徒に対して3回が基準。進路について真剣に悩んでいる生徒対象。
- (2) カウンセリングに来る生徒の悩みの例は以下の通り。

「保護者と意見が違う。」

「行きたい学部はだいたい決まっているが、本当に自分のしたいことができるのか、自分にあった学部なのかがよくわからなくて、進路について不安に思っている。」

「将来の夢が大きく2つにわかれている。とりあえず片方の夢に向かって進路選択をしようと思っているがもう片方の夢も同時に追いかけていきたいので、どちらの夢に対しても悔いのない進路を選択したい。」

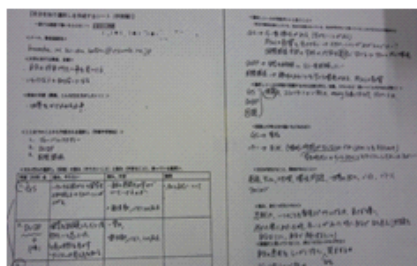
「就職まで考えて、選択しを3つに絞っている。自分に本当にあっているのはどれなのかで悩んでいる。」

- (3) キャリアカウンセリングのねらいとプロセスは以下の表の通り。

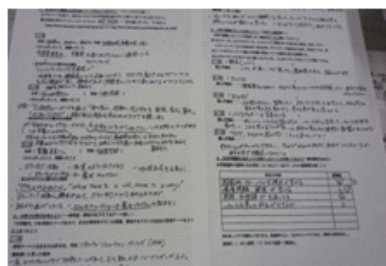
	ねらい	キャリアプランニングプロセス	使うツール
1回目	①信頼関係構築 ②主訴の明確化 ③インフォームド コンセント	「1. 意思決定の必要性の自覚」 「2. 自己の再評価」 興味(好きなこと)、能力(スキル)、価値観(重要だと信じていること)の確認	「自分を知り、選択しを作成するワークシート」(自分の振り返り、学部を考える)
2回目	①学部の選択し作成 ②大学での目標 明確化	「3. 職業、仕事の特定」 →学部、所属集団の特定+ライフロール探し 「4. 選択しに関する情報収集」 →先輩調査	「満足する進路決定のためのワークシート」(大学の情報収集、ロールモデル探し)
3回目	①進学する学部の 仮決定 ②(行動計画作成)	「5. 仮決定」 →進学先学部の仮決定	「選択しを数値化するワークシート」(選択しの魅力を数値化する)

- (4) カウンセリングで使ったワークシートは以下の通り。(詳細はまとめの冊子にあり)

(1回目)



(2回目)



(3回目)



(5) キャリアカウンセリングを受けた生徒の感想例

- ・自分の夢を話すことができた。分析したり自分について知っていくのはすごく楽しかった。
- ・人に話したり、聞いてもらったり、自分のことを紙に書きだしたりするのは、頭の中だけで考えているのと全然違って改めて大学のことを考えるいい機会になった。心も軽くなった。
- ・本当にカウンセリングを受けてよかったです。カウンセリングを受ける前は頭の中が混乱していて、何からまず整理すればいいかわからなかったのですが、順番に整理することができ、自分がどのようなことをしたのか、大学でしかできないこととはなど時間をかけてきちんと考える機会になった。
- ・自分が本当に行きたくて、自分にあっている学部をちゃんと決めることができました。

4. おわりに

中学校や高校にスクールカウンセラーがいる例は多いが、キャリアカウンセラーがいるということは極めてまれである。「キャリア教育が必要」と強く言われながら、なかなか全体に浸透しないのは専門家不在ということも大きいのではないだろうか。各教科の授業をするにあたってその教科の教員免許が必要であるように、教えるにあたって一定の水準を保とうと思えば、教える側の専門性の高さは重要である。「心のケア」もスクールカウンセラーという専門家が入ることで、各校の実践レベルをあげることができた。専門家が学校にいて、現場の教員にも研修などでその専門性が伝わりやすくなる。これだけ「キャリア教育」の重要性がいわれているのだから、専門性のある人を、きちんと各学校に配置していくべきではないだろうか。専門家がほとんどいない今でも教員の自主的な勉強や頑張りで各校の実践が進んでいるのだから、専門家導入による効果は大きいだろう。

また海外に目を向けると多くの国でキャリアカウンセラーが学校にいることは当然であるということも忘れてはならない。今回カウンセリングを受けた生徒全員がアンケートで、「キャリアカウンセラーは学校に絶対いた方がいい」と答えていた。スクールカウンセラーが関わる生徒は「今すぐ対応しないと命の危険がある」というケースもあるのに比べて、キャリアカウンセラーがかかわる生徒はそういうことはあまりないだろう。その点で対応する緊急度は低いかもしれない。しかし重要度はどちらも同じであるし、キャリアに関わることは生徒全員が直面することであり、対象とする生徒はキャリアカウンセラーの方が広い。キャリアカウンセラーによる生徒へのかかわりは「緊急ではないが、重要である」場合が多いと言っていいだろう。「緊急ではないが重要なこと」にこそ時間をかけるべきであるというのは、時間管理術の教えるところである。現在学校は「緊急で重要なこと」にふりまわされすぎて疲弊してしまっているという面は否めない。キャリアカウンセラーには「緊急ではないが重要なこと」に時間をかけるという雰囲気や学校で作っていくという使命もあるのかもしれない。

いずれにせよキャリアカウンセラーをキャリア教育、キャリアカウンセリングの専門家として各学校に配置していくべきである。これはこの研究を通してだけでなく、自分自身 CDA というキャリアカウンセラーの資格取得過程での学びを通して強く感じたことである。専門家の学校現場への導入についてモデルケースが積み重なっていけば、その中で「日本型モデル」も作られていくだろう。自分自身中学校・高等学校教員のキャリアカウンセラーとして、今後も子どもたちの夢を育てるべく頑張っていきたい。(研究成果をまとめた冊子が必要な場合は酒井までご連絡ください)